

伊久礼

第七十号



井 栗 公 民 館 刊

伊久礼

第七十号

はじめに

井栗公民館長 五十嵐 章雄

今年も皆様に御協力をいただき文集「伊久礼」第七十号をお届けすることができました。御寄稿いただきました方々並びに、関係者皆様に心より厚く御礼申し上げます。

能登の大地震で明けた令和六年でした。この辺り、人的被害はなかったようですが、灯籠が倒れたり、建物が傾いたりといったことはありました。能登では夏に大水の被害もありました。一日も早い復興を祈るばかりです。

八月には南海トラフ大地震の警戒情報が出て、心配されましたが、幸い今のところ何もありません。私は仕事で香川県の高松市にいましたので、翌日の東海道新幹線が動くか心配しましたが、少しの遅れ程度で東京に着きました。しかし上越新幹線が大宮の手前で神奈川付近で起きた地震で止まってしまいました。幸い二十分ほど停止しただけで帰ることができました。

それにしても、車内で一斉にスマホの警報が鳴る↓列車が急停止↓車内の電気が非常灯一つになる↓冷房が切れてだんだん車内の温度が上がる、という恐怖はなかなかのものでした。

今年も下手な字ですが「陽来復」書いてみました。この言葉、冬至を意味するのだそうです。すなわち陰の気が極まって陽の気に転ずる、日が一番短くなつて、あとは次第に日が伸びてくるという意味であります。つまり悪いことが起こって極まると、後はいいことばかりになるということを表しているとか。

さて、来年こそは…。

※ なお「陽来福」と書いた書もありますが、福は当て字だそうです。

最後になりましたが、文集「伊久礼」をお読みいただいた皆様には、ご意見、ご感想などをお寄せいただきましたらありがたく存じます。今後ともよろしく願いたします。

令和六年十一月

目次

題字 元井栗小学校校長 故 安 中 久 雄（俊道）

はじめに	井栗公民館長 五十嵐 章 雄	1
聞き書きレポ	坂 井 潤	3
北海道開拓神社祭神 松川弁之助翁の功績	村 越 允 弘	12
居場所を作ったアメリカ留学	小 柳 拓 夢	15
ルビコン川	酒 井 文 男	17
故郷の思い出	遠 藤 カ ッ 子	22
私の山歩き、山ある記 八	菅 原 昭 子	25
女将さんの牛ラーメン	金 子 靖 夫	29
あつたらしいな！こんな〇〇	井 栗 小 学 校	37
布ぞうり作りを体験して	旭 小 学 校 二 年 生	40
作詞 平和つていいね	長 橋 正 宣	43
作詞 防犯のうた	長 橋 正 宣	43
俳句 自然教室の思い出	旭 小 学 校 五・六 年 生	44
俳句 四季詠草	伊 久 礼 俳 壇	45
あとがき	発刊委員長 大 山 隆 夫	46

掲載順不同

聞き書きレポ

話し手 坂井 潤 さん

聞き手 五十嵐 章雄

昭和のころ、東京塚野目郷親会」という名の会がありました。これは東京で塚野目村の出身者が集まり、お互いの親睦を深めるとともに励ましあつて明日への活力を養った集まりでした。

東京塚野目郷親会の中心人物であつた坂井寅三郎さんは、明治三十六年五月、現在の新潟県三条市塚野目に生まれ、十八才で上京し、日本橋浜野家に五年間修業の後、大正十四年、二十三才で東京・阿佐谷に和菓子店「虎屋」を独立開業しました。その後、日本の和菓子業界の発展、阿佐谷商店街のために大きく貢献されました。現在は三代目となる孫の坂井潤さんが「どらや椿山」を切り盛りされています。

坂井寅三郎さん略歴

明治三十六年（一九〇三） 五月 坂井家次男として生まれる。

大正十年（一九二一） 上京、皆川弥市氏の紹介で芝のあられ御

小売・佐藤商店に入店。

大正十一年（一九二二） 四月、佐藤商店退店、弓町の松月堂、本

郷岡埜菓子店を経て日本橋浜野屋菓子

大正十四年（一九二五）

店に見習いとして入店。

四月、独立に備えて浜野屋を退店。十一月、現在地に開店。

昭和五年（一九二八）

杉並菓子組合設立、理事に就任。

昭和七年（一九三二）

杉並菓子同業組合設立、組合長に就任。

昭和十五年（一九四〇）

七月、東京生菓子工業組合杉並支部長となる。

昭和十六年（一九四一）

九月、東京生菓子工業組合統制委員並びに参加を兼任。

昭和二十二年（一九四七）

東京和生菓子工業協同組合常任理事、業務部長となる。

昭和二十五年（一九五〇）

二月、東京和生菓子商工業協同組合設立、常務理事に就任。

昭和二十六年（一九五一）

四月、阿佐谷商店会会長に就任。

昭和二十七年（一九五二）

杉並商店会連合会副会長に就任。全

国和菓子協会副会長に就任。

昭和二十九年（一九五四）

第十三回全国菓子大博覧会（京都）理事審査員となる。

昭和三十二年（一九五七）

第十四回全国菓子大博覧会（長崎）常任理事となる。

昭和三十三年（一九五八）

中央複々線化対策協議会阿佐谷地区

委員長に就任。

昭和三十四年（一九五八）六月、東京和生菓子商工業協同組合専務理事に就任、同時に自動的に東京菓子組合連合会副会長となる。十一月、阿佐谷商店街協同組合理事長に就任。

昭和三十五年（一九六〇）六月杉並区商店会連合会会長に就任。
昭和三十八年（一九六三）十月、都道補助一三三号線道路建設事業促進委員会委員長に就任。

昭和三十九年（一九六四）万国博覧会協賛全国和菓子大品評会名誉顧問に推される。

昭和四十年（一九六五）杉並警察懇話会副会長に就任。第十六回全国子大博覧会（秋田）常任理事審査員に推される。

昭和四十一年（一九六六）東京食品信用組合理事、東京総合食品学園理事、東京製菓学校顧問、阿佐谷駅南口広場補修工事協会会長に就任、全国菓子工芸大品評会（大阪）名誉顧問に推される。

昭和四十二年（一九六七）四月、日本菓子教育センター理事監事
六月、全国生菓子業者大会議長団团长、七月、杉並少年育成会会長就任。

昭和四十三年（一九六八）杉並警察懇話会監事に就任。第十七
全国菓子大博覧会（札幌）相談役に
推される。

昭和四十七年（一九七〇）杉並区商店会連合会名誉会長、阿佐
谷商店街振興組合相談役、杉並警察
懇話会監事、杉並警察防犯協会副会
長、杉並消防予防協合理事。
九月に永眠。

五十嵐 昭和五十六年にお宮の屋根の大改修をして、その時に。東京郷親会の坂井屋（寅三郎さんの弟・保治）さんと（丸富産業の）五十嵐庄平さんから百万ずついただいて、その（建てた石碑の）写真もあります。石垣とかも会の方から寄付していただきました。

坂井 祖父（寅三郎）は私が小学五年生の時に亡くなっていますけど、いろいろ聞いた話とか思い出とかですと、秋にわざわざ菓子土産を持つて帰って、（実家の仕事を）手伝って帰ってきたとか、していたようですね。祖父が先に東京に来て菓子屋をやり、その後坂井屋さんがうちで勉強して、独立して坂井屋を築いて、兄弟といえどもお互いに切磋琢磨して成長していたようです。

坂井屋さんもそうだし、祖父もそうですけど、こっちに出てきて商売はしていたものの、自分の出た田舎を、出てきたから自分は終わり」ではなくて、ずっと大事にしていました。祖父は、体はちっちゃかつ

たですけど、パワーがある人でしたね。坂井屋さんは豪快な人で、この兄弟は(お金など)出すところはどんと出す。

祖父は努力家だと聞いています。学校出てすぐに東京に出てきて、菓子屋をやるつもりはなかったようです。蕎麦屋か菓子屋と考えたらしいです。多分、それはいろんな人の話を聞くと、食べることは絶対に無くならない。洋服などは我慢できるけど、食べるものは我慢できない。どっからかはわかりませんが、蕎麦屋か菓子屋を考えて、菓子屋にして日本橋の菓子屋に修行に入って、生活費以外は全部貯めていて、貯めたお金で阿佐谷にお店を出したという話です。

なんで阿佐谷かというと、日本橋のお菓子屋さんで配達しながらいろんなところを見てきて、どこが店を出すのにいいか考えていたらいいです。で、この阿佐谷がいいんじゃないかと思って、阿佐谷にお店を出したんだと聞きました。独立して店を出す、それには勉強もしなきゃいけない、お金もかかる。勉強して、お金を貯め、店を出し、そして次の事を考えていた。自分で路線ができていますよね。

椿山」というのを名前(俳号)にしていたんです。今でも椿山は残しているんですが、椿山の登録商標をとってまで、大切にしていました。

五十嵐 先の先まで考えてやるという、先見の明もあるでしょうし、考えられるのがすごいですね。

坂井 お店を出すといつても、お金の面も貯めるのも大変でしょうし、食べるものにしろ、着るものにしろ、贅沢はせずにまるまる給料を当てたんでしょう。戦争で焼けはなかったですけど、苦勞して駆けずり回

って、材料買つてなんとか商売して、甘いものに飢えているから作ったものは売れたそうです。戦後の時代でした。

五十嵐 関東大震災の時には被災されたんでしょうか。

坂井 被災したとは聞いていなくて、戦争の時は仏壇をリヤカーに乗せて疎開したと聞いています。当時の仏壇なので直しておこうと、今でも(私の家に)大事にしています。

五十嵐 ご実家に行かれたことはありますか？

坂井 私は行ったことがなかったのです。それで、一回だけは見ておきたいと思うて、何年も前になりますが、十年位前でしょうか、おばあちゃんと息子さんが元気なころに一回行きまして、家でちよつと話しました。おばあちゃんが、(寅三郎さんは)秋に大量に持ちきれないほどうちのお菓子を持つてきて、近所中に配っていたと、言っていました。その後、いわゆる寅三郎の時に集団就職でうちに来た、今もいるのですが、佐藤の実家が近くなので、そこへちよつと寄つて話をして、もう一人新潟から出てきた、その人は長岡なのですが、亡くなって長岡のお墓に眠っているの、三条から長岡に行つてお墓参りして帰つてきました。

毎年秋には(実家から)お米を送つてくれて、私(ばあちゃん)が元気なうちは送ると言つておられました。お米を送つていただいたお礼に、いつもお菓子をお送りしていたのですが、(ばあちゃんが)「こんな高級な東京のお菓子を。」なんて言っていましたね。ある時、送つてこなくなつて、一年くらい前にちよつと心配なので電話して状況を知りました。

（実家は現在誰も住んでいません。）一回おじやましておいてよかったと思います。

五十嵐 地元と自分の出た家を大事にしてられたようですね。

坂井 寅三郎は次男で家は長男が継いで、その方も最後は体調が悪くて東京に連れていたんです。坂井屋さんと祖父とで話して、東京の病院に来なさいと、具合が悪くてうちの二階で寝ていたのを見たことあります。最終的には亡くなつて、昔ですから、貨車に棺桶乗せて新潟まで、当時ですから関越自動車道はないので、多分下の道で行ったでしょうけど、それで連れて行つたと。兄弟愛つてすごいありましたね。

五十嵐 家族のまとまりが強かったですよね。

坂井 樺並木の事が本（追悼 坂井寅三郎）に書いてありますけど、通りにある樺ですね。地主さんの御屋敷に樺があつて、そこは樺屋敷と言われてまして、祖父はこの土地には樺が合うんだと判断して、東京都と杉並区と交渉して、商店街ももちろんお金を出したんでしようが、阿佐谷中杉通りに植樹をして今に至ります。都道なので木の管理は東京都の管理で、父の頃までは、剪定だと「いつ剪定しますね」と、連絡はきていたんです。

五十嵐 地元にも貢献されていたんですね。

坂井 祖父が倒れた時たまたま私は祖父と家にいたんですね。たまたま父も母もいなくて、トイレから出てきて、ちよつと父を呼んでくれと話しがあり、父を呼んで、救急車で病院に運ばれて、今でいう癌のステ

ージ五で、もうどうしようもないと、一回手術はして帰ってきましたが、その後、調子が悪くて入院しています。

お葬式もたくさんの方が来てくださつて、それだけ、つながりとか信望があつたです。霊柩車の前を白バイが先導し車列をなし斎場に行つたのは、初めてだと思います。当時は車列を作つて、乗れない人はマイクロバスで行きました。杉並警察懇話会の副会長や監事をしていた関係で警察の方で配慮してくださつたようです。組合を作るときもお金がかかりますから、商売して利益を上げ、それを自分の懐にいれるのではなく、恩返しに、この街のため、組合のため、地元のためにお金を使っていましたね。自分の身なりとか着るものとかそういうのにはあまりお金をかけなくて、そういうのにはほんとお金を出す。

五十嵐 ピアノを学校に寄付されたりとか。

坂井 自分の出た学校に寄付していたと、本（追悼 坂井寅三郎）に書いてありましたね。

五十嵐 今郷親会はあるんですね。

坂井 父の頃はあつても郷親会の話はしてなかったので、私はその話は聞いていません。

◎ここからは坂井寅三郎さんについて、追悼 坂井寅三郎「より、小
学生の頃や家族のこと、上京してからのこと、地域への思いを自伝と
回想録から抜粋して紹介します。

よく口にしていた言葉

何事も自分ひとりの力では成し遂げることはできない。良き先輩、
良き友人・知人など多くの人の協力があつてこそ初めて成就すること
ができるものだ」

「自伝より」

小学生の頃や家族のこと

塚野目小学校に入学、一年の受持は五十嵐久雄先生(村の神主)で
あった。学校は大栄寺の庭にあった塚野目校であった。四年の時に、井
栗小学校と合併。

六年になったころ学校に補習校(後の高等小学校)が併置されたが、
校長と五十嵐先生が家に父を訪ねて、寅三郎君は学校でいちばんよ
く出来るのだから、ぜひ進学させてほしいとすすめてくださったが、父
は家業を手伝わなければならないからの理由で断った。そばで聞いて
いて涙がぼろぼろ出て困った。

小学校卒業後、父、兄、母と野良仕事をした。同時に大日本中学
会講義録をとって中学の勉強をしたが、台数と英語が分からなくて
困った。二年くらいして元川氏のところへ夜行つて習つて、ようやく通
信教授の卒業証書をいただいた。」

大正十四年、郷兄と独立の相談をし、足りないお金を貸してくれる
といい、理解をいただき、阿佐谷に店を買い、十一月一日に開店。独
立する。」

「生懸命に働き、二年目で拝借金二千元を兄に返金でき、さらに
金利とお礼の意味で千円を兄に送った。賢人の兄は、現金のままでお
くと金は消えてしまうからと、その千円で三反歩すなわち九百坪の
田地を求め、東京田」と命名して愛情こめて耕作した。」

上京してからのこと

同郷の皆川弥市氏を頼つて上京し、就職先もお世話いただいた。」

上京は、大正十年の十一月ころと思うが、雨が降つて寒い日であった。
母の心づくしの初めて着る角袖、角帯で、衿まきを首に巻いて、木綿
物ではあるがすっかり洗濯してさっぱりした仕事着二枚ずつ、それに
小学校一年生からの賞状、卒業のときいただいた辞書などを行李に
入れて兄が背負い、急行が一ノ木戸には停車しないので三条駅まで送
つてくれた。まだ上越線はなく、長野回りの十四時間の長い汽車の旅
だった。上野駅は朝の十時ころだったと思う。皆川君は休みをとって、
弟の巳代治君と出迎えてくれた。」

東京では働いて仲間にいじめられたり、働いて先輩に悪く言われたり
した。」

どんなに忙しくてもいいから仕事を覚えられるところに行きたいと考
えた。」

苦しいときの神頼みと。上野の山上で、こっちが郷里とおぼしき方向に向かつて手を合わせ、白山神社に「どうぞよい主人を授け給え。どんなにつらくても三か年辛抱しますから・・・。これから主人を探しに山を下ります」と願かけをした。」

次に行ったのが浜野屋さんであった。以前の私だったら、もっとよい主人、もっとよいお店をと考えて飛び出しただろうが、こんどは郷里の鎮守様に願をかけたのだから、どんなことがあっても辛抱しようと決心した。ずいぶんつらいこともあったが、そのたびごとに「白山さま白山さま」と唱えて辛抱した。」

「回想録より」(地元・友人知人・旧社員・親戚関係)

兄弟愛もまた世間のうらやむところであった。大成する人たちの条件である豊かな情操のせい、父親を早く亡くして厳しい社会を生きてきた環境のせい、こども心に見ていた私には肉親以上の何かがあったように思われた。祖父が亡くなったのは父が十九才、叔父(寅三郎)が十四才、末の保治叔父が二才のときだったそうである。叔父が独立して阿佐谷に開業するとき、私の父が田畑を全部勸銀に抵当に入れて援助した話も、叔父は何回となく私どもに語ってくれた。後日、叔父がよく思いついたことをしたものだと言いつと、田んぼに出るときはいつもお前が先頭だったから、という返事が返ってきたそうだ。」

都湯でのある日、君も越後だつてねえ」と言つて、懐かしい郷里の訛

りで話しかけてくださり、奉公の辛さ苦しさについての話や、私の郷里から五、六里しか離れていないご自身のくじのことなどを話され、終始優しいまなざしで語りかけ、越後人の誇りをもつて、どんなに辛いことがあつても歯をくいしばつてがんばりなさい」といった意味の言葉でむすばれたあの日のことが、私の脳裏から離れない。」

つつがなく満期除隊をして懐かしい阿佐谷に復職した私は、ご近所の旦那がたにひとおおりの挨拶にまわつた。それから二、三日後でもあつたのだろうか、玉丸の店にいた私のところに、坂井さんが、店の営業用ではなく、どこか家庭でもつくるあの普通の大きさのお萩を、どつさり持つて来てくださった。軍隊では長いことご苦労さん。特製おはぎを作つてきたから食べなさい。むこうでは虎屋のお菓子を夢に見なかつたかね。坂井さんはそう言つた。すでにそのころ物資は不足を告げはじめていたのである。その時ほど私は感動したことがない。」

「自身少年時代から努力苦辛な経験から、青少年に対する温情はきわめて深いものがございます。私の町会では毎年、中学卒で就職する少年少女の激励会を催しており、毎年諸先生の講話をお願いしております、その時講師にお願いした先代(寅三郎さん)のお話を私は今でも思い起こします。」

郷土を愛すること人一倍で、母校にピアノを寄贈したり、全校生徒

にノートや学用品を贈呈したりしている。昭和二十七年だったか、学校の創立五十周年を迎えたとき、上京して寄付などをお願いしたところ、快くお引き受けただいて、記念式典にも出席してもらった。全校生徒を前にして、元気で勉強に励んでほしいとやさしく語りかけた坂井さんの姿を、今でも思い出す。」

戦後の阿佐谷の街づくりは、坂井さんがおられなかったら実現しなかったのではないかと、私は思っている。補助一三三号線の道路作りや、中央線の複々工事、阿佐谷駅の急行停車、駅前広場づくりその他の問題で、建設省（現国土交通省）や国鉄（現JR東日本）・東京都などをいっしょに回ってみて、つくづくそう感じた。なせ、そんなに地元のために一生懸命になるのですか」と聞いたことがある。坂井さんは「街がよくなれば自分のところもよくなるんですよ」と笑って答えられた。坂井さんが発案した櫛の並木は、今日も優しくその枝をのびし、やわらかな緑の陰を落として阿佐谷の繁栄を見守っている。」

商いとは決して利得だけを求めるものではなく、心の深さ、誠実さがなければならぬというのが坂井氏の信念です。故人はつねづね粗食をくらい、水のみ、肘を曲げてこれを枕とす。楽しみもまたその中にあり。不義にて且つ尊きは我において風雲のごとし」と言っておられました。」

東京塚野目郷親会とは

大正十四年（一九二五年）に発足し、東京周辺に在住する新潟県三条市塚野目出身者及びその縁故者で組織し、会員相互の親睦を図るのを目的として、親睦会・敬老会・旅行会の開催などの事業を行っていました。また、地元にも多くの寄付をされるなど、ふるさとを大事に思っておられました。創立五十周年記念誌は、坂井寅三郎さんが五十年誌を出したいとの意向のもと準備をされましたが、療養の甲斐なく、不帰の人となられ、その後故人の遺志を継いで会員により昭和五十年に五十周年記念誌を出版しています。現在郷親会はなくなっていますが、昭和の歴史史料としても貴重なものと思います。

記念誌は、

一、郷親会の変遷

二、塚野目郷親会だより

三、随想（会員の五十周年記念寄稿）

四、塚野目郷土誌 佐藤宅治編

ほか、白山神社と神楽の写真、スナップ写真、歴代会長・現役員・会員の写真、郷親会会員名簿（昭和五十年一月現在）、郷親会会則の構成となっており、

口絵 故郷の田舎風景、挿絵 錦鯉の国、

日本美術院院友 萩根沢 映泉

扉題字 日本書学院理事 前沢 春溪

昭和五十年四月十八日発行

会の様子や故郷への思いについて

（東京塚野目郷親会 創立五十周年記念誌」より抜粋）

昭和三年頃から会長宅を宿として、無尽会という、一夕歓談したり、子どもが生れた、また風邪を引いたと和気あいあいとした楽しい集まりでした。」

白山神社拝殿新造営の記念、村社昇格の記念や、第二室戸台風で境内の大杉数本が倒れ、玉垣の破損の復旧工事などその費用を会員で協力された。」

昭和三十八年四月十九日正通寺にて亡き先輩の法要を営む御案内状には、

「幼少青年時代我が村は一社三ヶ寺という珍しい宗教的に恵まれた環境で、清岩寺殿には観世音菩薩あり、大栄寺殿には地藏尊あり、正通寺殿には薬師如来ましまして時折に大般若会施餓鬼会各仏の御名目の供養等和尚様禪師殿の説教を母のふところにあつて聞き聖典の経風に浴し青年夜学時代に三ヶ寺の和尚様毎週土曜日精神講和を受け今尚記憶に新たなるもの多く私等の心の糧として波荒き社会生活の精神のより処として大いなる力となった事は誠に幸でありました。』」

昭和十一年頃かと思いますが、誰言うことなく白山神社の元旦祭の氷^{シメ}ついた一箸の御供の味なめる程の御神酒の味等が話題となって元旦祭に百目ローソクを献灯しようと毎年十二月中旬頃お金でお送りしたように思つて居ります。」

昭和十九年頃から疎開という問題が起りましたが、会員は皆郷里があるという強みから余りうろたえず悠々と商売に励んでおりました。」

戦後、昭和二十六年の新年会で白山神社元旦祭灯明代を集めて金壺千円を帰郷の方に預けたり、昭和三十六年の第二室戸台風で白山神社の玉垣が破損し、復旧工事をお願いし、工事代金を数氏の御協賛で送金した。」

戦時中から戦後にかけて十五年間の空白ができたが、東京塚野目村の出身者が集り、お互いの心の励ましと慰めになる、郷親会という灯台の火を大きく明るくしようと行動を始めた。年齢、仕事に関係なくして、十代から八十代のお年寄りまで全く多様であるから味があつて面白いのだと思います。」

昭和四十五年の三月の総会で、最長老の方からのお祝いの言葉の中に、塚野目村の歴史一二〇〇年を繙き、村の由来の深さ、先祖の努

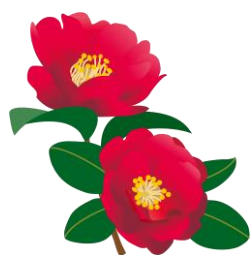
力など、新年総会に相応しく、花を飾り、会場は感銘を受けたのでした。」

編集に寄せて

郷親会は、この様にして長い年輪を経て来た人生の歴史です。幸にして故郷に生れて、故郷を持ち、それを愛する有難さは、それをしめじみ噛みしめる時に始めてわかる気がするのです。時代は移り変わりますが、明治から大正、昭和の世代が、この親睦会をより広く、より多くの人達の手によって発展してゆくことを願っている次第です。」

会員の寄稿の中から抜粋

故人坂井寅三郎氏の三つの言葉、そのうちの一つは地域社会に惚れ



結びに

以上、今では古き良き時代のお話となった感がありますが、人とのつながりがもっと深かったころの様子が随所にみられるお話がありました。

とらや椿山の三代目である坂井潤さんからは二代目の父が健在であれば、もっといろいろなお話が聞けたのに、と残念がられました。同感です。

末筆になりましたが、お忙しい中時間を割いて貴重なお話をお聞かせいただいた坂井潤様に心より感謝申し上げます。

これからも貴重なお話をできるだけ記録する活動を続けられたらと思います。情報がありましたら是非公民館へお知らせください。

参考文献

東京塚野目郷親会五十周年記念誌

追悼 坂井寅三郎

北海道開拓神社祭神

『松川弁之助翁』の功績

村越允弘

北海道の玄関、函館を訪れた人は、昼は五稜郭、立待岬を観光バスで廻り、夜は函館山から香港に勝るとも劣らない夜景を眺める。然し、この五稜郭を造り、函館の街の基礎を創ったのは、新潟県南蒲原郡井栗村井栗（現在の三条市井栗）の大庄屋（北海道開拓神社の祭神として祀られている）松川弁之助とその一族、であることを知る人は少ない。

わずかに、五稜郭資料館に松川弁之助の子松川藤蔭の描いた、弁之助の肖像画に説明文が、添えてあるのがあるだけである。

それにひきかえて、五稜郭に立派な碑のある新撰組幹部の土方歳三は函館の町のために何をしたか。偉大な歌人、石川啄木の碑が立待岬にあるが、同じく函館の町になにをしたか。

ここに改めて、全財産を投げ打って函館の街造りに尽くした、松川弁之助の業績を検証してみたい。

その様なかに昭和十三年（一九三八年）に北海道の開拓発展に貢献した先人三十七柱をまつるために、開拓神社が建立された。その中のひとつに、松川弁之助之命とある。

松川弁之助は名を重明、三之助、後に三弥と改めた。享和二年

（一八〇二年）四月九日越後国蒲原郡井栗村（現三条市井栗）に生まれた。祖先是越後国上杉謙信の重臣松川大隅守だという。

平成五年五月に函館市の郷土史家・石黒正英と知り合い、松川弁之助一族のことを知り、これほど郷土函館はもとより近郷に至るまで、開発に努力した人があるうかと感心して、仲間の郷土史家に働きかけ、平成五年十一月十八日に「松川弁之助の功績を讃える会」を発足された。

二十名程の仲間が集まり顕彰碑を建てようと、弁之助が蝦夷地で使用した「手鑑札」を本体として、弁之助が北地に詠んだ「北蝦夷の沖漕船に浮きねして果てのかぎりの月を見しかな」を主文として、函館市の木オシコ（一位の木）と三条市の木、五葉松を植樹された。それに松川家一族の方々に協力を願ったと言われていた。

そこへ、平成十三年十二月に三条の歴史研究をされていた西方清七様から、松川弁之助の生誕二〇〇年になるので、これを機会に是非井栗で顕彰碑をとの話が掛かったがまずは松川家の了解を、と話があり、松川家に相談すると、この不景気の時に皆様にご迷惑は掛けられないと、函館のことからも言われた。が地元では、松川家に迷惑は掛けないと言うことで説得した所、翌年二月になって了解を得た。

ならば生誕の日である、四月九日までに顕彰碑をと、発起人を立ち上げた。

まずは石屋を探し、どの様の形にするか大忙しだ。井栗の出身者の

居る、若槻石材店に石材等の協議をして、弁之助翁の一枚しかない、子息藤蔭画伯の絵を、それに和歌を入れることになった。

その頃は弁之助翁の足跡については、大正四年十一月十日従五位が追贈されたことであり詳しく知らなかったのである。

そこでその後に弁之助翁の記録をたぐってみた。

松川家七代目、松川弁之助は父六代目三之助重基（渭水と号す）、母は地藏堂の富取家の人、その六男として享和二年（一八〇二年）四月九日に生まれた。諸兄が夭折しているので、父重基が天保十四年（一八四三年）六十九才で没すると、直ちに家督を相続した。時に四十二才。大庄屋役に就くと、朝は七ツ（四時）に起床、夜は九ツ（十二時）に就寝、日夜公務に精励し余暇を農事の改良に尽くした。執務は公正にして偏せず、強きを挫き弱きを助け、力を公益の増進に尽くした。

下条村天神林（現加茂市下条）より信濃川に至る排水渠は弁之助も開墾に係わるもので、これにより水患を除くことが出来た。現在は埋め立てられて立派な道路となっている。

弁之助は親孝行の人で父母に奉養して、苟しくもその命に背かず、このことが村民の尊敬を集めてきた。父重基が病で倒れたとき、嗜好する煙草を父の病、体にも害があると廃めた。病床の父を慰めようと村の青年を集め角力、競馬、撃剣を催した。病勢進むと、窃かに、弥彦神社に詣で、平癒の祈願を込めて、一昼夜に一万発の矢を射的に、身命に誓い遂に、快癒せしめた。

弟、重之助光熙も七千射を奉納すと、松川弁之助小伝等にあるが、弁之助の高祖母、曾祖母は南蒲原郡新潟村（現見附市新潟町）の小林氏の人で、重之助はその小林太郎兵衛の十男で幼にして、弁之助の弟として養われ、後に北蒲原郡築地村中条浜（現胎内市中条浜）佐藤広右衛門光一の養子になった人のことである。

安政二年（一八五五年）五月十七日夜五ツ半時（午後九時）松川家が祝融の神に会い出火、幸い全員、村の成相観音へ参詣にかけ留守で死傷者はなかったが、歴代の当主が集めた家具、書籍、書画幅、悉くを消失、刀剣は伯州家長の太刀、金重長義の刀、国綱の薙刀なども焼けた。普通の庄屋格と異なり、由緒正しい地方の豪族であったことを知ることができる品々であったが、焼け残ったのは古い土蔵一つと戸前の新門と味噌蔵などであった。

この火災でも弁之助の渡道の決意は変わることはなかった。

このことについて弁之助の孫、第四郎は「画聖松川藤蔭伝」に当時の松川家の財産は田地だけで、十三ヶ村に渉る広大な土地を有していたから、家や道具を焼いたくらいは家運の上にはたいした影響はなかった。それより時節到来、亡父の遺命をなしてこそ、孝行と心得ていたのであると述べられておられる。

事実、家や道具を焼いた位で松川家の家運に影響はなかったかも知れないが、歴代当主が集めた図書、書画、武具等は金銭に換算できない貴重な品々であったことは事実である。

松川弁之助は安政二年函館の御用向取扱方の許可を受けると急ぎ帰村、渡航の準備をした。又地元鎮守の式内社伊久礼神社に画家でもある三人の子息の画を開拓安全を祈願し奉納している。藤所二十七才が岩、妹藤華十九才が牡丹、藤蔭十三才が孔雀、である。尚額の作成は地元で同道した、平次郎、外、勘四郎と弥六となっている。未だに変色もせず原色のままである。

弁之助は安政三丙辰年（一八五六年）準備がすべて整うと、手人数十名を連れて函館に渡った。

当時の函館は猫の額のように狭小の一部落で、後背地は荒漠な荒地で、一步も足を踏み入れられないような荒廃地で、弁之助は荊棘を切り、岩石を砕き、田畑を墾き灌漑排水の溝渠を堀、農耕を推め、道路を拓き、交通を容易にした。

渡道して直ぐに尻沢辺の御用畑に蔬菜を培養、畑に下肥の利用を奨励した。

松、杉の苗木も育て、谷地頭山腹、招魂社の側に植えられた、杉の管林は実に弁之助の仕立てた物であった。

十二月に公用で一時帰国した弁之助は、翌年から本格的な活動をはじめた。尻沢部の東北の谷地、一万五千坪を請地とし、排水を施し、土塁を築き、野飼の鳥の侵入を防いで、新畑を開いた。

函館逢来町附近は当時砂浜で、暴風の際は地藏町の背後まで波浪が寄せて来るようだったが、官に願い出て海中に石垣を築いた。

函館八幡宮社頭の右側の大櫓は、弁之助が当時越後から取り寄せ

た、櫓苗木だと言われる。

安政四年、五稜郭入札。規模、五万四千百貳貳坪、予算九万八千両、建物入札、安政四年八月上旬、五人が入札、弁之助落札（坪壹分余安）、建坪参万参千坪。

調査はまだですが、古里かかし館「資料館の一番目の掲示パネルは 松川弁之助翁」の写真と、旧発足村と、前田村幌似地区の歴史に書かれてあるとのこと、三条歴史研究会の会員である、宮田さんからの朗報も期待しながら次号へ。

松川弁之助翁の功績を大きく致したいと、思つて居ります。



居場所を作ったアメリカ留学

小柳 拓夢

大学生の頃、私は資格試験のために英語の勉強を始めた。当初の目的は単純で、テストで良い成績を取ることだった。しかし、勉強を進めるうちに、ただの試験対策にとどまらず、もっと深く英語を学び、実際に英語を使って何かを成し遂げたいという思いが強くなっていった。特に「英語を使って誰かを助きたい」という願望が芽生えたのだ。だが、単に机に向かっているだけでは、この願望を実現するには限界があると感じた。もっと実践的に、英語を「話す」力を身につける必要があると思い始めたのである。

そんな中で、私が出した結論は「留学」だった。英語が日常的に使われる環境に身を置き、現地の人々と直接コミュニケーションを取ること、本物の英語力を養いたいと考えたのだ。特に、アメリカは多様な文化が共存する国であり、そこでの経験が私にとって大きな学びになると確信していた。

大学三年生の夏、私はついに二週間の短期留学プログラムに参加することとなった。アメリカに到着したその瞬間から、私の期待と興奮は最高潮に達していた。異国の地での生活は、見るもの聞くものすべてが新鮮で、私の好奇心を強く刺激した。言語や文化の違いに驚きながらも、その違いを受け入れ、積極的に現地の人々と交流することを心

がけた。

特に印象に残っているのは、現地での「日本の文化紹介」の機会である。私は十年以上続けてきた書道を披露することにした。書道は日本の伝統文化の一つであり、その美しさをアメリカの人々に伝えたいという思いから、この活動に参加したのだ。現地の人々は非常に興味深く、私が書く漢字に見入っていた。特に彼らの名前を漢字で書いてあげると、その場で大変喜んでくれた。その笑顔を見るたびに、私もまた喜びを感じ、書道を通じて異文化交流ができたことに大きな満足感を得た。

しかし、この留学での経験は楽しいものばかりではなかった。私は当初、外国人を助けたい」という目標を持っていたが、実際にはその逆で、助けられることの方が多かった。英語力の未熟さゆえに、言いたいことがうまく伝えられなかったり、相手の言っていることが理解できなかったりする場面が多々あった。特に、初めての海外生活に戸惑い、不安や緊張が募る中で、現地の人々の親切な対応に救われることが何度もあった。彼らは私の拙い英語にも辛抱強く耳を傾け、困った時には手を差し伸べてくれた。その温かさに触れることで、自分の無力さを痛感しながらも、人間の優しさに深く感動した。

この留学体験は、私にとって大きな転機となった。帰国後、私は自分が受けた恩を返したいという強い思いから、大学内で積極的に留学生に話しかけるようになった。彼らは日本語の勉強や日本での生活に多くの困難を抱えており、私はその解決に少しでも役立てればと思った

のだ。最初は緊張していた彼らも、次第に私を信頼し、心を開いてくれるようになった。私もまた、彼らとの交流を通じて多くのことを学び、成長することができた。

驚くことに、気づけば私の周りには多くの留学生の友人が集まるようになった。今では、日本人よりも留学生の友達の方が多いほどである。彼らとの絆は私にとって非常に大切なものとなり、彼らと一緒に過ごす時間が私の「居場所」になっていった。留学生二十人以上が集まる場で、彼らと一緒に笑い、悩み、支え合う日々は、私にとって何ものにも代えがたい宝物である。

この経験を通じて、国境を越えた友情や助け合いの大切さを深く実感した。異なる文化や言語を持つ人々と心を通わせることができたのは、私の人生において非常に貴重な財産である。そして、これからも困っている人々には、国籍や文化の違いを超えて手を差し伸べられる存在でありたいと強く思う。人と人とのつながりが、時に私たちを救い、そして豊かにしてくれることを、これからも多くの人に伝えていきたい。



ルビコン川

酒井文男

水田はキラキラと日差しを反射させ初夏の雲を映していた。日没を過ぎればカエルたちの鳴き声が一斉に響き渡る。

そろそろみんなが来る頃だ。お茶の用意を頼むよ。それと菓子もあるかなあ。俺達の話が長くなるかもしれないからさ」

ええ、コーヒーでいいでしょ、挽いてあるの。みんなが来たら入れるしお菓子もあるわ」

ああ、そうしてくれ、ありがとう」

地区から任された役目とは別に、Fを含めた四人には成り行きの話があった。率先はしないが進むのであれば賛同するとFは決めていた。

そのあたり、水が張られた水田に冬眠から覚めたカエルが集まってくるように、時期が来て条件がそろえば偶然ではなく必然にそうなることに少しも躊躇はなかった。だから、その話が進めば決める事は多い。それで「長くなるかも」とFは妻にこわった。

しばらくして古い玄関の引き戸は開く。約束の時間が近づき、広高い天井の客間にその四人がそろろう。

Fさん、忙しいかね」

Nさんは座ると、そう言って近況を聞く。

ああ、年がら年中さ、一向に会社は辞められないままさ。この歳でね」

定年を過ぎているFは、役員なので勤めを続けている。NさんはFより年下だけれど、定年退職して今年から農業に専念していた。その下のTさんは農業のかたわら大きな会社から作業を請け負う仕事をしている。一番年下のOさんは近くの会社に勤める兼業農家で、委託された水田も耕作する。彼らはみんなFよりも年齢は下だけれど、米農家という意味ではFよりずっと大先輩だった。

それぞれ父親とともに頑張つて、この地区の農家を率先して守つてきたと言える。だからFは、父から遅く引き継いだ自分だけが彼らより少し後退する思いを隠しきれなかった。Fは所有する二町ばかりの水田を、片手間に成り行きでするずると、それこそ機械が使えるうちとはいうような考えで今まで続けて来たからだ。自分の何倍も耕作する三人を前にしてそう思うと、そういうFを見透かして言った妻の言葉が脳裏に浮かぶ。

あなた本当は、田んぼは好きじゃないんでしょう？ イヤなのはわかるわよ、見ていれば」

ああ……。でも、イヤとヤルは別さ」

言い逃れのつもりで言った訳じゃなかった。好きじゃないのは凶星だったからだ。が、しかし自分はそれから逃げ出している訳じゃないと言いたかった。このままわずかの水田を、いつまで耕作していくのかと自問自答することはあった。農業情勢の憂いを語るような真似などはしないが、現状の行く末が頭にならないわけではない。だがそれを父に問うことも相談することも、今はもうできなかった。

他界したFの父は晩年、パーキンソン病で体思うように動けなくなつた。止む無く施設に入つたが頭は最期までしっかりしていた。時々自宅に連れて来るその時、田んぼを回れと言う。そして『肥しが足りねえな』と絞り出すような声で言つた。そんな父も生まれ育つた家の座るソファは楽ではないようで、しばらくして『帰る』という。父にとつてここはもはや自宅ではないのだと思つた時Fは、淋しさと胸が痛んだのだつた。

その父が逝つた日は施設から『ちよつと様子が心配です』と連絡があり家族で駆け付けた。少し弱つた様子が見られたけれど、応答はしっかりしていた。Fは自分だけ泊ると決めた。父を一人にしておけなかつた。

家も田んぼも俺がいる。心配ないさ」

意外な言葉が出た。本当は、採算が取れない自営農家は委託だと考えていたからだつた。なぜ？ そんなことを言う……」と、自らを問うた。好きではなかつた農業だが一年の移り変わりを体験する感動もあつたからなのだろうか……。

春の田植えが終わつて一か月を少し過ぎると、水田は中干という工程に移る。その時にバイクのような乗用溝切機で水田に溝を切る。それが赤とんぼの羽化に遭遇することがある。

早朝の朝露の中、ズボンを濡らしながらまたがつて進むと、羽化したばかりの赤とんぼがよたよたと飛び出してくる。羽が固まらず風を切れないから、稲すれすれに飛んで二〜三メートル先の葉につかまる。

その赤とんぼの尾は赤くない。やがて彼らは遠くに見える里山に行き、水田から消える。そして秋、尾を赤くして帰ってくる。銀色になった稲穂につかまる赤とんぼの邪魔をして稲を刈り取ることになる。Fはそういう光景の中、季節を肌で感じ、自然の営みに触れ、感慨に浸つた。だから普段の合理的な考えとは違う言葉は、自然と共生してきたもう一人の自分に備わる真の心の声だ。そうFは理解をした。そして握つた父の手に少しだけ力を込める。

すると父は突然強く握り返した。もうそんな力は残つてはいないと思つていたFは驚いた。父は目を大きく開き、自分の息子を見て何か言いたそうに口を開く。だが声にはならない。しかしFは感じた。そして答えた。

わかつたよ、わかつた。田んぼはちゃんと俺がやっていくから、心配しなくていいさ」

それを聞いて安心したのだろうか、力を抜いて目を閉じる。父はもう休んだようだ。

しばらくして、施設の人が突然急ぎ足で駆け付けてきた。

モニターの様子が変です！ Sさん！ わかりますか！ 聞こえますか！」

そう必死に父に問いかけている。

えっ？」と驚きFも声をかける。

父さん！ わかるかい！ 聞こえるかい！」

しかし、手に力はなく返事は無い。父への約束はもう取り消せなくな

った。

田のカエルの鳴き声が聞こえる客間にそろったみんなの顔を見ていたFの脳裏には、父との最期が思い浮かんでいた。今日の話はその水田のことだから、父がこの部屋に来てくれたのかとその部屋を仰ぎ見る。古いゼンマイ式の柱時計は七時を少し過ぎていた。

Fは話の本题に入る。

その営農のやり方だけどね、地区全体を巻き込んでちょっと面倒だと思う。やるなら有志の経営だと思うよ。農業法人の立ち上げは早くした方がいいと思うんだ。一年に一回しか米は取れない。四半期や半期で収支がわかる普通の会社とは違って、一年待たなきゃそれが知れないからね。だから、経営のノウハウは少しでも早く実践で身に着けた方がいいのさ。みんな年寄りなんだから。おっと俺がかけ離れて歳が上だつたね、あははは」

Fは、農業は企業という認識が必要だ。その経営とはそういうものだと言論を話した。続けてFは言う。

農業法人が出来たなら、それは有益だよ。誰が後継者になってもきつと楽だと思う。それと、俺達個人の農地の税金や土地改良費といった固定経費は毎年払わなきゃいけない。手放せば縁が切れるけど農地が売れない今となつては米を作り続けなきゃ、その金は生まれてこない。持っている農地は、結局厄介なお荷物になってしまったってことなんだ。一昔前の親父たちの頃とはえらい違いだね」

様変わりしていく水田のことを、Fは憂いたわけでも何でもない。そういう現実が方々であるし、耳にすることを話したまだった。

するとFの話を聞いてそれぞれがうなずいていた中で、Tさんが急に口火を切った。

今年やろうよ。創ろうよ、その農業法人を」

俺もそう思う。水田農業の受け皿だよ」

俺もいいと思う。法人化は流れだよ」

続けざまにNさんもOさんも賛同した。

えっ？ それって、本当かい？」

Fにとつて瓢箪から駒だった。みんなにそういう思いがあつたのかと、論すような言い方をしていたFは思わぬ展開に驚いた。そして企業の「人」はここにいたとわかった。

本当にやるか？ 創るのか、農業の会社を。この四人かい？ もう少しメンバーを募ってみてはどうか、人手が必要だろう？」

いや、この四人だよ。少数精鋭さ！」

Tさんは、はつきりそう言う。他のみんなも同じ顔をしている。機は熟していたのだ。結局みんなの気持ちを感じ取ってはいなかった。反省の心が湧き、Fは踏ん切りがついた。そして会社立ち上げと施設建設の情報収集を提案する。

Fさん、さつそく段取り、頼むさあ！」

とNさんは間を置かずにFに注文をする。

俺が？ まあ、一番上だしね。年下に任せちゃ、恰好が悪いね。わかつ

た。いろいろ調べて連絡するさ。それでさ、登記となればハンコもある。だから法人の名前も決めなきゃいけない。どうする？」

前から思っていたんだけどね……」

そう言つてTさんは切り出した。

名前はね『S Y』にしようよ。ずっと考えていたんだ」

ローマ字か。洒落ていてカッコいいね。でも…… みんなの頭文字とも違うし、それに三文字つて…… 何？」

「こだよ、ここ！」

Tさんはそう言うを下を指さした。

「こつて、Nは新潟？ Sは三条、Yは柳川だ！ そっか、ここかあ。いいねえ。どういう意味かって聞かれて逆に話題になるねえ」

農事組合法人N S Yが誕生した瞬間だった。それぞれの思いが一つになつて動きました。

やがてみんなが帰った客間に一人、Fはノートパソコンを開いてじつと画面を見つめている。そこに彼の妻が入つて来た。

「あら、みんな帰ったのね。あなたがこつちに来ないし静かだし、様子を見に来ただけど…… 何してるのよ？ パソコンで」

Fの妻はコーヒークップの後片付けをしながらパソコンを覗き込んだ。

何処？ そこは外国？」

Fが見ていたものはイタリアのマッテオッティ通りの橋で、そこを流れるルビコーネ川だった。もちろん行ったことなどないけれど、その川を渡

るカエサル気持ちに触れたかったのだった。

ルビコンだよ、ここは」

何？ それつて…… どういう川？」

それは、紀元前四十九年一月十日、ユリウス・カエサルはそこで自らの決断の重さに立ち止まった。武装解除をしないまま川を渡ればローマ内戦の火蓋を自らが切ることになり、彼の朋友とも戦うことになるからだつた。

ほら、カエサルが立ち止まつて決断をした川さ。ああ、彼の名はシーザー！ つていう英語読みも有名なあ。」

「え…… で、なんで今見ているわけ？」

ああ、カエサルのね、戦いか否かの決断とは違うけど、俺達にとつては重い決事だったんだ」

だから、何よ？」

俺達はもう、ルビコン川を渡ったんだよ」

そう言つてFは、マッテオッティ通りの橋のもとに立つカエサルの像を、パソコンのパノラマ画像で立ち上げて妻に見せた。

ローマの内戦に勝利して、政治改革を成し遂げた偉人でも、決断の時は深い思いに落ちるんだ。ルビコン川を渡る』つていうことは、後戻りできない重大な決断をする。そういう意味なんだよ」

Fは妻に説明しながら、知らず知らずのうちにその決断を思い返していた。そして心に上書きするように声に出していたのだつた。

次の年の春、予定通りに乾燥施設は着工する。苗も順調に成長し

ている。四人は田打ち、代掻き、田植えの工程を話し合う。そして田植え後の管理も相談する。色々な決め事はみんなで話をするのだ。前向きな相談が出来る良いメンバーだとFは思った。これならうまくいくに違いない。たとえ障害が起ころうとも解決に向かって進められるという予感が強い。いや、予感じゃなくて事実だ。走り出してそれが証明できている。

五月、新しく購入した八条植え田植機のディーゼルエンジンは、豪快な音を水田に鳴り響かせた。オペレーターは若い長男たちに任せられ、Fも彼らの補助を買って出て田植え機の後ろで苗の補充をする。

Fさん、危なっかしいなあ。落ちるなよ！」

大丈夫さ、しっかりつかまっているから」

みんなでやる農作業はすこぶる楽しい。そして、休憩時間に談笑する奥様方の声も弾んでいる。意外だなとFは思った。今までは何かに追われてばかりで楽しいと思ったことなかったからだ。ただ終わらせなければいけないという義務感の農作業だった。目的が同じ人同士は前を向いているから全く違うと感じた。だが、この農作業の手間賃が出せないようでは困る。それに、利益が無く税金が払えないようでは企業として不合格だとFは考えていた。不安は付きまとうが、とりあえず一年頑張ってみるさと頭を切り替える。今は無事この田植えを終えること。それに集中するだけだと思うことにした。

夕方、Tさんが次の田植の提案をする。

明日からコシヒカリだ。新川を渡った西から植えよう。それからこつち

に来ようよ」

新川とはこの地区の水田地帯を縦断する排水路の名前だ。

翌日、苗を運びながらFは、これが俺たちのルビコン川なのかと新川を見る。

俺たちのNSYは絶対に潰せないし潰さない。何度でも、ルビコン川を渡つてやるさ」

Fはアクセルを力強く踏んで、その川にかかる橋を渡った。

NSYが稲作をスタートした令和四年、耕作面積は十八町だった。

三年目の今年は三十町になった。来年はまた二町ほど増える。

この秋も、収穫の戦場にコンバインがディーゼル音を響かせている。黄金色の稲穂は刈り取られ、その粃を軽トラックが積んでひた走る。晴れた秋空の日差しは強い。だが彼らは暑さに負けてはいない。みんな頼もしい戦士の顔をしているのだった。

故郷の思い出

遠 藤 カツ子

節分にはこんな行事もあった

二月二日は節分だった。ことしは本成寺の鬼踊りも、コロナで中止だという。私が子どものころも、結婚して子どもが生まれ、幼稚園のころから家でも豆まきをした。いろいろなエピソードがあつて楽しかった。そのほかに節分にはこんな行事もあった。

焼嗅という行事だった(風習)。年配の方は知っていると思うが、もう一度思い出してみてください。節分の朝、豆をまく前に建物すべての入り口に焼いたイワシの頭をぶら下げるのである。住宅、離れ、農舎、トイレ、風呂場などすべてに。

私の家は浜から遠かったので、毎年にはぼしだった。それと一緒に豆がらや、モチ草、そのほか、においの強い植物を一緒にぶら下げた覚えがある。

こういうことを教えてくれる先人たちはすっかり少なくなつた。今、伝統行事を続けているところがうらやましい。獅子舞だけは今でも続いているという、終焉前にもう一度見てみたい。

故郷の小正月の思い出

平成三十一年二月

小正月の朝、父親がすべての神棚から下げたおへそく(と言っていた)でお払い旗を作っていた。それを持つて東の方向から向かいの村に向かつてこう言った。

向こうの村の子どもたちよ、いつまで寝てるんだ、早く起きて追わないとこちらから追つてやるぞ、田んぼのクロ(畦)を荒らす黒ガラスよ、そんな悪いことするとつかまえて頭割つて塩漬けにして籠にぐるぐる巻きにして大島に流すぞよ(気仙沼にある島)、大島で近いならば、遠い遠い佐渡島かホーイホーイ」

私は何の悪いことをしたのか、その佐渡島のある新潟(三条)に流された。この先はどこへ? 天上か?

なんて残酷な歌だろうと思つて歌っていた。第一、頭を割つた時点でカラスは死んじやうだろう。それを島流しにするなんて!

農家の人の気持ちも分からないわけではありません。せつかく難儀して塗つた畦をグシャグシャに荒らします。カラスは天敵で憎かつたのでしよう。戒めだ!

今は機械でトントントン、あつという間に畦はでき上ります。私は今でもカラスは嫌いだ。ゴミは荒らすし、洗濯物は持つて行くし、しかし、江戸川のキョエちゃんは大好きだ。こんど寺泊のカニを送るよ。

成木責めも行った。

なるかならんか、ならんなら切るぞ」人間の精(弟)なります、なります」柿の精(私)

ときどき、

ならん、ならん」

と言うと、

ならば切るぞ」

と弟はマサカリを柿の木に向かって振り下ろします。

決して木には傷つけはしなかった。弟は誇らしげに見えた。その弟も三年前に亡くなった。天上で思い出しているだろうか。部落の獅子舞にもかり出されていたよね。毎年いろいろなハプニングがあったよね。それとも思い出してみたい(出てくるかなあ)。

いつかじじが言った。

ババの話を聞いていると、江戸時代か明治時代の人のようだ」

なんと失礼な同じ年じゃないのよ。生まれも育ちも違ふところもギヤップがあるのか。

悪かったわね、江戸時代の女房で」

昨年、姉に聞いた。

今でもこのような行事しているの？」

獅子舞はまだ続いている。一昨年、集会所であわへば作りをした」

どんなあわの花ができたのか見てみたかった。五穀豊穡を願う行事である。

忙しい農作業の中、両親はたくさんの思い出を作ってくれた。お陰で私は今、こうして講釈ができる。ありがたや。ありがたや。私は子どもや孫たちに何も残してやるものがない。正月、孫娘が言った。

ババはこれでいいよ」

と「合流点」を読んでいた。今にこれも忘れ去られるだろう。テレビもラジオもない、スマホ、ケイタイは夢のまた夢。そんなところで生まれ育った私は、こんなことしか語れない。鳥追いが蛇足して百足になったようだ。自分の田舎のことで恐縮ですが聞いてもらえたら、うれしく思います。

暖かくなったら会いに行きますヨ

平成三十一年 春

今年のうぐいすの初鳴きは二月二十四日だったとか。

うぐいすといえば昨年盆に里帰りしたとき、甥が藪の中でうぐいすの巣を見つけたと見せてくれた。生まれて初めてみた。やっぱり藪の中か。スズメやカラスの巣とは全く違う作りだ。芸術的な作品である。蚕のまゆ玉のような作りで、緑色をしたテニスボール位の大きさだった。材質は木ではない。何かの草の茎のようである。それもそのまま使用した形ではない、ちゃんと細かくさいてある。これでは時鳥がほしくなるのも分かる。

そこにいた姉がこんなことを言った。うぐいすは最初から「ホーホケキヨ」とは鳴かないと。そこに至るまでには相当な時間を要するのだと、何通りもの鳴き方をまねしてくれた。子どものころはカエルのような鳴き方で「ギゲヨギゲヨ」と鳴き、いろいろな鳴き方に変わって、おとなになって初めてその美しい声になるのだと。

六十年前、町から山へ嫁いで来た姉さんは今では山のことは何でも分かる。体験がものをいうのでしょうか。私は「ポーホケキョケキョケキョ」と何でおまけが付くのかと思った。オレはおとなになったのだぞ」という、あいさつだったのか。これを読んだ専門家は「そんなはずがない」と笑うでしょう。専門書には書いてないかもしれませんが、私は姉の体験した話を信じる。たとえ間違っていたとしても、何ら命にかかわる問題ではないでしょう。うぐいすは保内山でもよく見かけます。鳴き声ももうじき聞こえるでしょう。モスグリーン色をした凜とした姿で森の中を飛び回っています。暖かくなったら会いに行きますヨ。

ことはあの山に登れるかなあ、だいぶ足・腰が弱くなったようだ、うぐいすの巣に出会えたらなあ、最高である。



私の山歩き、山ある記 八

菅原 昭子

自分で考えなさい

夏七月の末、岐阜県高山市の新穂高温泉に到着。夏休み中とあって観光客、登山客でにぎわっている。私も今晩はキャンプ場に前泊して翌日から待ちに待った入山だ。一日目笠新道經由、丸一日九時間かけて漸く稜線に出て笠ヶ岳山頂に到着。テント泊。二日目長い縦走の始まり。今日までは天候も申し分なく予定通り順調。双六岳のテントサイトで泊。三日目今回の計画のメイン、槍ヶ岳の肩で標高三〇〇〇mの景色と空気を堪能してまったり過ごすこと。そのために一日を当てて楽しみにしていた。ところがその大切な日なのに天気が怪しい？早朝の発時は、霧がゆつくり押し寄せては流れ去るの繰り返し。そんな様子に一喜一憂しながらもなんとか晴れて欲しいと祈っていた・・・西鎌尾根をひたすら進み約四時間後槍の肩に到着。まだ九時少々過ぎたばかり。願い虚しく晴れるどころか雨着を取り出すはめに。はどうしようかな？これからの天気が一番気になるので槍ヶ岳山荘から気象情報を得ることにする。掲示板で知らされた天気は無情にも「日中霧雨」明日の天気はまだお知らせ無し。全く困り果てた。こんなはずじゃなかった。長期予報と首っ引きで絶対晴れると信じていた。三〇〇〇mで遊べると楽しみにしていた。がっかりの私は奈落の底

に沈んでしまった。じっとしてよくよくしても仕方がないのでザックを山荘にデポさせてもらって空身でとりあえず槍のてっぺんへ行き気持ちを紛らわせ時間稼ぎをすることにした。しかし当然の事、山頂だって何も展望がきかず、ただ現実を受け入れるしかなかった。梯子や鎖の岩場を丁寧の下りて山荘へ戻った。また最新の気象情報を確認するが何度見てもそうそう良い方に変わるわけではない。期待は持てない。心で泣いた。明日の天気が回復するなら停滞も考えるがそれもわからない。先へ進もう。本当にそれでいいか？先へ進むと言うことはもう一つの目的、一日で槍から東鎌尾根經由で燕岳、中房温泉へ下るチャレンジもできなくなる。仕方ないと決心した。そうと決まれば身支度を整えて出発、山荘を出た。

雨脚は幾分弱くなっただろうか。山荘から数十メートル進み東鎌尾根への分岐点へさしかかった時だった。雨傘を差した人がこちらに歩いて来た。手ぬぐいをかぶり、サンダル履きの四十代始めくらいと見受けられる男性だった。私は思わず、

東鎌はこっちですね」

と声をかけた。そう言い終わらないうちに、なんとばかな質問をしたのだろうと自分で自分に呆れてしまった。更に追い打ちを、その男性は、

自分で考えなさい。地図を出して自分で調べなさい。山の中、聞く人がいなかったらどうするんだ？」

と鋭い視線と厳しい声色が返ってきた。その人は雨で停滞を決めた

登山者だろうか？ それとも山荘のスタッフ？ 彼は山をきっちりやつていて、私のような甘っちょろい登山者は許せなかったのかもしれない。そう言うってその人は白い霧の先へ進み去って行った。私の精神状態はどうだった？ 自分で考えろと言われた時『意地悪』と相手に対してまず反発心が沸き起こったが彼の言っていることは正論だった。私自身も普段から自立した登山者を心がけていたはずなのに、私がまさかそのような指摘を受けようとは全く情けなかった。私の行く所こっちですか？ なんて聞く方も聞く方、いったい私は何を考えていたのだろうか。今日は天気が悪くて残念です。」

位の事を話していれば問題無しだったと思う。実は私は行き先が分からなくて確認したい訳ではなかった。朝から、いや三日も前からまともに人と会話をしていない。それに今日の天気の違い、夢破れ沈んだ心に打ちひしがれた。なんとか明るい話題でも聞けるかと、例えば、

明日は晴れる」

と冗談でも笑える話ができるきつかけになったらと、とつさに口から出た言葉だったと思う。きつと人恋しかったんだ。こんな個人的な内面をたまたまの通りかかった人に察してもらえない訳がない。言い訳はしない、したくない。自分が弱いだけのこと。この経験から単独で入山するには一切の隙なく、心身共に強くなければならないと心した。

このあと雨の中、沈んだ気持ちで東鎌尾根を進む。ガスガスの中をしばらく行くと岩場のコースから外れている人影発見！

「つち、つち」

と大声で叫び注意喚起、呼び声に気付き正規ルートに戻ってきた男性に、

「ベンキ印を見失い進路が分からなくなった。遭難するところだった。ありがとう」

とお礼を言われた。山で実践活動を始めるとだんだん普段の調子が戻ってきて気持ちも楽になった。その日はヒュッテ西岳のテントサイトで幕営することに決めた。ここのテント場は初めての利用。一方ヒュッテの小屋泊を申し出た登山者に、

見ての通り、うちは経営規模が小さいから、お昼過ぎですでに満杯だと、午後三時以降に到着の登山者を受け入れられなくなる。申し訳ないが明るく時間がある内は先へ進んでくれないか」

と小屋主人のやりとりの話し声が聞こえた。営利目的では無く真に登山者の安全を考えてくれている姿に感心しありがたいと思った。私は風当たりが少ないテントサイトを教えてもらい雨の中テント設営。その後夜半までずーっと止まずの雨で危うくテントは床上浸水になりそうだった。なんとか凌いで朝を迎えた。そして嬉しいことにまさかの朝日！ 朝日がほんとに嬉しかった。太陽の熱で暖められた湿り気が湯気になってヒュッテのトタン屋根からモウモウと湧き上がっていた。やがて地面からも周りの灌木からも。単純な私はお祭りみたいに浮き浮きした。この光景で心の高揚をしっかりと感じた。気分はスカッと晴れ渡り、みごとな大自然の演出効果だった。小さな人間が一回り、ほん

の一回りだけ大きくなれた気がした。槍のトンがりが見えたり。そして槍のトンがりも昨日と今日の私をしっかりと見ていたはず。これでもいい。心も足取りも軽やかに表銀座コース経由、青空と晴れの景色を楽しみながら燕岳へ、更に中房温泉へ無事下山。温泉へ直行だ！

こうして四十km超のロング縦走は無事終えた。私は「強くあれ」とよい経験をさせてもらった。

平成十四年七月二十五日～三十日 単独

幌尻岳（ポロシリダケ）

ささやかなこだわり。北海道日高山系の幌尻岳は計画、準備の段階から本当に大変だった。登山口の平取（ピラトリ）から定番沢コースは幌尻岳山荘の宿泊予約が取れず途方に暮れた。自然保護とヒグマ対策のためテント泊は認められていない。険しさから日帰りは到底かなわず、この山に登るには山中小屋泊しなければならなかった。ツアー関係者がほとんどおさえているのだろうか？ ツアーに乗つかれば交通手段の心配も無くガイド付き、食糧はスタッフが運んでくれるという売りもあり、お客さんになって先頭について行けば間違いなく山頂まで行かれるのだろう・・・しかし自分たちの力で山に行きたい。年齢を考えてもギリギリ最後のチャンスかも知れない。まず自分でやれることをやってみよう。それでダメなら最後の手段でツアーに参加させてもらうことにしよう・・・ということで宿泊予約が取れないのなら別コースから、新冠（ニイカップ）ポロシリ山荘泊りで幌尻岳に行くしかない。

決心して計画した。こちらは体力勝負のコースだそう。新冠の町奥から更に四十kmのダートな林道を進みイドンナツ山荘で車は終点。マイカーをここに駐めて、登山口まで十七kmを徒歩でスタート。約六時間かけて新冠ポロシリ山荘到着。一日目無事目的地に到着。翌日は山頂アタックの日。下山後山荘二泊目。三日目はまた十七kmをひたすら歩いてイドンナツ山荘の車まで戻るという三日かけての計画で幌尻岳に臨んだ。

当日の天気は神のみぞ知る。雨が降らなかったら良い位の気持ちで構えていた。長い林道歩きはアブが鬱陶しく緩いアップダウンは、ジワジワ応えてきた。アタックの日、なんとか曇り時々晴れの天候。沢沿いに四十分位進み、大きな渡渉が一カ所。それまでは登山靴を脱いで沢を渡っていたそうだが、現地調達の丸太が渡してあった。そこをバランス取りながら渡ることができた。ありがたかった。ここから急登の始まり。一気に突き上げる尾根をなんとかだましだまし登る。地図に瘦せ尾根と表示がある所も難なく通過。水場（沢の水量は十分である）があるので必ず煮沸してから、あるいは濾過後飲用する（を岩伝いにトラスして通過。そしていよいよお待ちかねお花畑、高山植物の楽園へ。エゾツジの鮮やかな色合い、ナガバキタアザミがしっかりと咲いている。お花を愛でながらゆつくりゆつくり高度を稼ぐ。大岩まで来ればまもなく山頂だ。山頂標識にタッチした時、これまでの心配や苦勞が報われたと思った。夢が叶った。パーティーのメンバーに感謝しなかった。

そして大雪山系とはまた違った日高の山々の奥深さを叩き込まれた感じだった。北海道はやはりでかいなあ。熊スプレイ持参して、悪天候にはダートな林道が通行止めになるため三日分の予備食と飲料水を用意することが新冠ポロシリ山荘利用条件の一つだった。コヘリの加入、登山届は必須等々。新冠ポロシリ山荘を管理する現地山岳会からの親切なアドヴァイスや入山に当たつての心構え、約束事など要求を一つひとつクリアしながらの準備だった。ツアー登山でお客様になるのではなく、自分たちが主体で登る山を体現できたことは本当に喜ばしく、嬉しかった。達成感も大きく膨らんだ。

幌尻岳（二〇五二m）

令和六年七月二十六日～二十八日

同行者 他二名



オカミ ギョウ 女将さんの牛ラーメン

金子靖夫

米沢」と聞くと、なにをイメージするだろうか？

歴史好きなら、米沢といえば江戸幕府により越後上杉氏が左遷された東北の小さな藩の城下町をイメージするだろうか。米沢藩は後年上杉鷹山が藩主の時代に財政再建を果たしたことで知られ、マネジメントのお手本を連想する経営者もいるだろうか。

山形県内の人なら、当然置賜^{オキタマ}地方の中心都市として認識するだろうか。そんな学術的なイメージはさておき。グルメな人なら、米沢といえば、米沢牛をイメージする人が多いはずだ。万人あこがれのブランド和牛産地だ。ご当地駅弁に「牛肉ど真ん中」というのもあるくらいだ。

そんな米沢市のJR米沢駅にほど近い駅前商店街に、牛ラーメン^{ギョウ}「ダイカク^{ダイカク}」がある。昭和年代末期に、旦那^{ダンナ}さんと女将^{オカミ}さん（夫婦）がオープンさせた店だ。店が軌道に乗り、銀行への返済も終了した頃、旦那さんは残念ながら五十代の若さで他界した。現在店を切り盛りしているのは、七十代女将の和田美登里^{ミドリ}さんと孫娘の橘^{タチバナ}あおいさんの二人だが。夜営業の時間帯はあおいさんに代わって、橘登和^{トワ}さん（美登里さんの実娘）あおいさんの母）が手伝いに入る。厨房を美登里さんが担当し、ホールサービスをあおいさんや登和さんが担当する。メニューは通常の「ポロ^{ポロ}うラーメン」・「おラーメン」に加えて、半^ハしょうゆラーメン・半

しおラーメン」があり、それぞれ並盛りと大盛のラインナップだ。

米沢駅前商店街はコロナ感染渦を乗り切り、再び活気を取り戻しつつある今日この頃だ。あおいさんは、通信制大学の学生で保育士の免許取得を目標にしている。昼間から夕刻にかけては、大角でラーメン屋の仕事。夜は大学のリモート授業やレポート作成に頑張る日々だ。まさに洒落^{シヤレツ}じゃないが、大角と大学の二刀流女子^{ニタウリウジョ}「なのだ」。

登和さんは、昼は米沢牛の食品加工関連会社で事務職を。夜は九時の閉店時刻まで大角で美登里さんのサポートをしている。登和さんの生活も二刀流女子としてハードなものだ。

登和さんの旦那^{ダンナ}さんで、あおいさんの父・橘昌悟^{シウゴ}さんは山形市に本店がある金融機関勤務で、現在は仙台支店に単身赴任中だ。この人は、義母が営むラーメン店を継いでラーメン屋のオヤジになる意志はない。それでも、大角の女達（美登里さん、登和さん、あおいさん）は店を美登里さんの代で終わらせたくないのだ。

春のとある日曜日：ラーメン屋が定休日の日曜日は唯一、三人の女達が安らげる日だ。週末土曜に仙台から帰宅している昌悟さんは雪のシーズン以外、日曜日は早朝からゴルフに出かけることが多い。したがって日曜の朝食はゆつくりと女達三人でとる。

美登里さんはごはんをみそ汁をメインに和食。登和さんとあおいさんはパンとスープをメインに洋食だ。ダイニングテーブル上で三世代の女子トークが繰り広げられる。

「レポートの提出は順調なのけ？」

登和さんの問いに……。あおいさんは余裕の表情で答える。

「うん。前期の分は、ゆんべメールで送っておいた。ほぼ完璧。なので今日はゆつくりの日曜だべ。あ。お母さん午後から映画に行かない？」
「下ム・クルーズのミッションインポッシブル』やつてるべ」

「ー。あお余裕じゃん。あと一年だし、がんばれ。んだな。トムの映画なら行こうかね。母さんは午後からどうする？」

登和さんが、こんどは美登里さんに振る。

あたしは、家でゆつくりしてるさ。昌悟さんのために牛すじの煮込みを仕込んでおこうかね」

ありがとう。あの人母さんの牛すじ煮込みが大好物だべ。晩ごはんは外で食べてくるなってLINEしておく。で。晩ごはんの時、昌悟も交えて、お店の将来のこと少し相談すつべか。あおもいい？」

「うん、いいよ。前にお父さん、事業承継制度があるって言ってたべ。全国にインターネットを通じて、お店をやつてみたい人を募集する国の制度らしいんだべ。おばあちゃんも、お父さんの意見を聴いてみるべし」

むだな。あたしは、米沢の牛ラーメンの伝統を守っていききたいんだつべ。いつも言ってるけど、一番いいのは、あおちゃんの将来の旦那さんが店を継いでくれることを妄想するつべよ」

美登里さんの理想はそこだ。しかし孫娘のあおいさんの人生まで自分の都合で決めつけるのはどうかと悩んでいる。婿の昌悟さんの意見に賭けてみるのもいいかと考えている。

その日の晩ごはんのダイニング……。大角を将来どうするか問題」につい

て協議がなされた。

牛すじ煮込みのご飯が一段落したところで、昌悟さんが事業承継制度のレクチャーをしてくれた。

「ーという制度なんです。もちろん、お店やお義母さんに金銭的な負担はありません。僕の方で、申込をしておきます。で、面倒な手続きはネット上でできますから。登和に任せるけど、大丈夫だつべ？」

昌悟さんは、金融マンらしい事務的かつスマートな説明で締めくくった。翌日は米沢から仙台まで早朝の長距離運転出勤の昌悟さんだ。女達がおめないことを願いつつ、協議を早くきりあげて自室に戻りたいのだ。わたしは、いいけど。あおはどう思う？」

登和さんは乗り気だ。

ラーメン屋さんで生計たてていきたい若者たら、全国にごまんとおるつべよ。私もいいと思う」

あおいさんも賛成にまわり、あとは決定権のある美登里さんだ。分かった。みんなに任せるべ。あたしはラーメンの味だけ伝えるべし」

近隣の田植えも終わり、梅雨入りもそろそろかと思われるある日の午後。ランチ営業の最後の客を送り出したあおいさんは、準備中プレートセットするため玄関に出た。すると、玄関先に一人の若者（男性）を伴いアラフォーくらいに見えるキャリアウーマン系の女性が店構えを品定めするような表情できよろきよろしていた。

あ。橘登和さんは、こちらにいらつしやいますでしょうか？」

女性が問うてきた。

はい。橘登和は私の母ですけど、昼間はここにはいませんけど…。失礼ですけど、どちら様でしょうか？」

あおいさんの問いに、女性が柔和な笑顔で答える。

『ごめんなさい。申し遅れました。私、厚生労働省・山形県事業承継グループの高梨タカナシです。で…。こちらは応募してこられた、辻ツジさんです』

辻という長身の若者が、ペコリと頭を下げる。

事業承継の件でしたら、私も祖母も承知しています。いま準備中の時間に入りますので、じつくりとお話をうかがえます。どうぞ、お店の中へ」

言って、あおいさんは奥の休憩室にいる美登里さんへ声をかける。

おばあちゃん。ちよつといい。事業承継の担当の方と、応募してこられた方が来られて」

うん。わかった」

奥から美登里さんが答えた。あおいさんが休憩室に置いてあるスマートフォンを確認すると、登和さんからLINEメッセージの着信が来ていた。

例の事業承継の件で、高梨さんという方と辻さんという方が、午後から行くから、よろしく』

とあった。もう、お母さんは仕込みで忙しい時間にLINEよこすんだから、とイラつきつつ。

『了解。なんと…今来ておられるつべよ。これから、おばあちゃんと相手するところだべ』

と返信した。四人でテーブル席で相對していると。美登里さんは辻をよく知っていると言う。

辻さんは、この店二度目だつべね？」

美登里さんの問いに辻が答える。

はい。二度目です。あの時は大変にお世話になりました。ありがとうございます。それから、僕のこと少し話していいでしょうか？」

美登里さんはあおいさんに目配せした。あおいさんはうなづいた。高梨も辻をうながした。辻が話し始めた。

僕の地元は群馬県の伊勢崎市です。家族は両親とも隣の太田市の自動車製造工場で働いています。兄弟は三歳違いの兄が一人います。兄は伊勢崎市職員です。僕は東京の工科大学でソフトエンジニアリングを学んでいます。実はいま三年生で、ゲームソフトの開発会社から就職内定をいただいています。それで、なんで今ここに高梨さんと一緒にいるかですが…」

辻が言葉を逡巡させていると。高梨が話しを受け継いだ。

私、一ヶ月くらい前にこちらの辻君からメールをもらったんです。大角さんの事業承継に興味があるってことで。それから二週間後、東京出張のうちに辻君と会って。大角さんの牛ラーメンと女将さんのことが忘れられないって。これは本気かと思って感じました。あとは辻君のほうから話してもらいますね。辻君大丈夫？」

美登里さんとあおいさんは、意外に思った。ソフト開発とラーメン職人を比べたら、誰だつてソフト開発を選ぶだろう。収入が段違いだし。ふ

たりは辻の言葉を待った。

両親が共働きで、自動車工場は土日も出勤のことが多くて。だから土日は小さい頃から兄と二人で近所の中華料理屋さんでよくランチしました。僕はその頃からラーメンが大好きで。高校時代は地元のラーメン屋でアルバイトしていました。大学に入ってからバイトしなかったんですが、コロナ感染のおかげでラーメン屋のアルバイトの口が全然なくて。普段は気分転換というか、ほとんど趣味というか、ネットで全国のラーメンを検索する日々なんです。それで、この大角さんの牛ラーメンを拝見しまして。いつか行ってみたい店、食べてみたいラーメンでした。夢がかなったのは、去年の夏でした…」

…辻のエピソード。

去年の夏のある日。大角・夜営業中(コロナ感染症対策で午後八時で閉店)。その閉店間際。ホールには美登里さんと登和さんがテーブル席で作業中だ。売上集計を美登里さんがノートに記帳し、登和さんが青色申告のため複式簿記アプリでノートパソコンに入力作業をしている。登和さんが作業中のパソコンで時刻を確認して美登里さんに声をかける。

あ、母さん。そろそろ、暖簾さげようか」

むだね。持ち帰り牛ラーメンと冷凍牛ラーメンのインターネット販売で、多少売上が持ち直してきたけど…。コロナで店じまいが早くなった商店街は活気が乏しいべ。八時十五分前だけど閉めるべ」

こんなやりとりをしていると、長身の若者がバイクのヘルメットを片手

に入店してきた。

あのー。まだ大丈夫でしょうか？」

はい。いらつしやいませ。大丈夫ですよ。おひとりさまですか？ カウンター席へどうぞ」

登和さんが若者を元氣よく迎え入れた。

ありがとうございます。牛ラーメンのしおを大盛でお願いします」

母さん。牛しおの大盛ひとつ」

あいよ」

カウンター席向いの厨房に入ると、美登里さんは手際よく、牛しおラーメンを作っていく。登和さんは、再びパソコン作業に集中する。

お客さん、学生さんですか？ バイクでどちらからこられたの？」

そんな美登里さんの問いかけに、疲れた表情の辻が答える。

きのう群馬の伊勢崎を出て。今日は新潟県的一般道を終日走って。とにかく米沢が目的地だったの…。もっと早い時間に来たかったんですけど、なんか閉店間際の時間で申し訳ありません」

大丈夫だつべ。県外からわざわざ、ありがとうございます」

この夏の辻のバイク旅は、実は傷心癒し旅だった。辻の大学生活はコロナ感染症のおかげで、ほとんどアパートでのリモート授業だ。レポート提出もメールでのやりとり。入りがかったバイクメカニクのサークルもかなわなかった。もう最悪の大学生活だ。せつかく希望のソフトエンジニアリングが学べる学校に入ったのに。そして、もっと最悪なのは、地元に残してきた彼女の陽華ヨウカに振られたことだ。東京と前橋の遠恋だし。コロナ渦だ

し。理由をあげればきりが無い。もてるタイプの陽華が気軽に会えない自分から、もつとカッコいい別の誰かに乗り替えたとしても不思議ではない。せめて夏休みに趣味のバイクで遠出だ。行くなら前から行きたかった山形の米沢だ。あの大角の牛ラーメンを一度食べてみたい。なんの想い出も、いいこともない学生生活だ。ひとつくらいやりたいことをやってみよう。そんな動機で米沢まで来た。

登和。パソコンで帳簿作業終わったら、先に帰っていいよ。戸締りはあたしがしておくべ」

あ。じゃ、母さん。お願い。今晚、昌悟に持たせる衣類の整理せんと」

辻は、女将さんと娘さんのやりとりを小耳に受け流して、牛しおラーメンに集中する。旨い。牛からにじみ出るだしとあつさりした塩の加減が絶妙だ。ちじれ細めんがスープとからんで、のどごしもいい。あとこの牛チャーシューだ。そもそもチャーシューというより、これはローストビーフだ。来てよかった。いやなことを忘れさせてくれるラーメンだ。辻はスープまで飲み干し、心も腹も幸福感で満たして、牛しおラーメン大盛を完食した。トワと呼ばれていた娘さんは帰宅したのだろう。店には七十代くらいの年配の女将さんが一人だけになっていた。素直な感想を述べて会計を済ませて、宿を探しにバイクを走らせようなどと思いつつ辻が言った。

女将さん。おいしかったです。ごちそうさまでした」

想定された答えというか、質問が女将さんから発せられた。

学生さん。これから今晚はどうするの？宿のあてはあるの？」

バイクに寝袋積んでますので、適当な場所で野宿です。夏だし、大丈夫です」

心配そうな表情を浮かべてから、とびきりの笑顔で女将さんが辻に優しく話しかけた。

あのね。この店の奥に畳敷きの休憩室があるの。野宿なんて言わないで、もしよかつたら休憩室で寝ていつていいよ。エアコンもあるから快適だべ。明日の朝は七時半頃に店開けに来るから、それまで店に居るべし。バイクも一晚駐車場に止めておいていいよ」

これは、うれしい提案だ。辻は感謝を込めて、礼を言った。

ありがとうございます。初めての場所で、スマホで宿泊施設も検索してきたんですけど、コロナの影響で適当な宿が見つからなくて……。遠慮なくお世話になります」

そんだ。休憩室の冷蔵庫の中に、缶ビールとかウーロン茶もあるから、飲んでいいよ」

ありがとうございます。僕、辻と申します」

美登里さんは辻を最初に見た時に、彼の全身から寂しげな影のようなものを感じていた。米沢の街は都会の繁華街と違い夜は静かなものだ。そのまま帰しても安心と思えたが、どこかほっておけない若者にみえた。登和さんを先に帰宅させたのも、辻に対しておせっかいかもしれないが、一対一で少し関わってみたい気持ちになったからだ。翌朝七時半過ぎ。夏の陽射しがまぶしい朝だ。美登里さんが大角に行ってみると、辻は店の駐車場に出ていた。なにやらバイクをいじっている。

辻さん。おはよう。ゆうべは寝られたかね」

「おはようございます。おかげさまで、ゆつくりできました。ありがとうございます
ございました」

朝から急がなくていい。梅干しと鮭のおにぎり作ってきたから、出発前にあたしと一緒に店で食べていくべし。お相手が若い女の子じゃなくて、ごめんね」

「ありがとうございます。いただいています」

辻の祖母は父方が北海道在住で健在なのだが、遠方のため滅多に会う機会がない。また、母方の祖母は辻が中学生の頃に他界している。したがって祖母くらいの年代の女性と接するのはまれだ。だけどこうして、大角の女将さんという何か落ち着く。心が安らぐ。辻は、古今の邦画鑑賞を趣味とする兄が以前言っていたことを思い出した。

『理想の母というか俺らにとつてはおばあちゃんくらいの年代だけど、岸恵子って素敵なんだよ。品のある役どころもいいし、逆に貧困の中にも凛とした庶民的なお母ちゃん役も俺は好きだ』

そうなんだ。女将さんの雰囲気はどこか岸恵子をイメージさせるのだ。

辻さん。ちよつとテーブル席で待つてるべし」

と言いくくと、女将さんは、厨房でミョウガと大葉入りのみそ汁を手早く作った。おにぎりもみそ汁も旨い。一晩の宿を借り。朝食をこちそうにもなり。このまま女将さんと別れるのはもったいない。すると女将さんの方から話をきりだしてきた。

辻さんが店に入ってきた時、なんか寂しげな雰囲気で、元気づけたかったんよ」

女将さんの気持ちがうれしかった。辻はこの女将さんになら話したいかなと思った。理想と違ったコロナ渦での学生生活のこと。彼女に振られたこと。この夏米沢に來た動機を話した。

「アチみたいな話ですみません。でも米沢に來て女将さんと知り合えてよかったです」

なんあも、遠慮せんでええよ。辻さん。あたしだって一緒だべ。コロナのことと恨んだよ。この二年。売り上げは四分の一位まで落ちた。やれ飲食店が感染広げてるだ。やれ消毒だ、やれアクリル板だつて。努力しても報われないつてこともあるんだべ。だけど、やんなくちやなんないことがある限り、変わらずに、おんなじ情熱で、おんなじ気力で、努力するんだべ。そうしたら意外なところから、解決の道が見えてくるもんだべ。うちの店も孫娘の発案でインターネットで冷凍牛ラーメンの販売を始めたべ。冷凍加工は娘の勤め先の会社でやつてもらってる。もがきながら努力すればいいのさ」

女将さんの言葉は身に染みた。

なんだか、僕も頑張れそうです。また牛ラーメンを食べに來ていいですか？」

今度は牛しょうゆラーメンを食べるべし」

辻のエピソードを含めた話しが一段落すると……。あおいさんが目を丸くして美登里さんの顔と辻の顔を交互に見つめた。なにかこの二人に絆

のような雰囲気を感じる。高梨も同じようなことを感じている。この辻という人は大角の将来をおもんばかつてくれているのだろうか。だとしたら大角の救世主だ。しかもこの人、大学受験で浪人してなければ、わたしと同じ年^三。もしかして、わたしの運命の人^三。などと妄想するあおいさんをよそに、その後は厚労省の高梨の事務的な説明が繰り返された。

では、実質的な経営権を辻さんへ譲渡するかたちでいいでしょうか？」

高梨のこのセリフに辻が即反応した。

「え。僕は当面経営権を必要としません。あくまで大角のオーナーは女将さんでいいんです。僕は一ラーメン職人として大角の仕事をスタートさせたいんです。もちろん将来は大角のマネジメントもやっていきます。女将さんやトワさん、アオイさんに認められたら僕が事業主になります」

並々ならぬ辻の決意に、美登里さんもあおいさんも圧倒された。それでは、辻さんが卒業される一年半後から見習いとしてスタートするかたちでよろしいですか？」

この高梨のセリフにも辻が即反応だ。

高梨さん。僕は人生の方向転換をしたいんです。大学は前期が終わる八月で中退します。今年の九月から見習いをお願いします」

これには美登里さんもあおいさんも顔を見合って驚いた。

辻さんが人生を賭けるにふさわしい店かどうか分からないけど。あたしも来年喜寿だべ。早く後継者が決まることに越したことはないべ」

美登里さんのこの発言後。辻の一大決意に一同は異を唱えることなく、うなづく状態だ。

それでは、私は山形の事務所に戻って契約書面を準備いたします。準備でき次第、橘登和様あてにレターパックで郵送します。返送用のレターパックも同封しますので、署名されて山形の事務所へ返送ください。辻君へは橘様からの書面を私が確認したのち、同様にレターパックで郵送します。署名されて返送ください。お願いいたします」

いい橘渡しができる満足そうな高梨の言葉で、この日は散会となった。

九月になり、辻は米沢の单身用アパートに越してきた。大角の昼営業は厨房に美登里さんと辻。ホールはあおいさん。夕刻から夜の営業は厨房に美登里さんと辻。ホールは登和さん。辻は余裕のある時はホールサービスも行う。こんな陣容に変わった。辻は美登里さんからマンツーマンでスーパの仕込みから、麵^{メン}の茹で方、ローストビーフの作り方などを教え込まれた。辻がスタッフに加わってから、あおいさんの日曜日の過ごし方が変わった。あおいさんは日曜のほとんどの時間を辻と行動を共にするようになった。まだ彼氏彼女の仲とかそういうことではない。二人でラーメン王国山形県内のラーメンを食べ歩きするためだ。他店のラーメンを研究する。そうすることで、大角の味をもっと進化させたいという辻の希望からだ。

日曜は午前九時くらいに和田&橘家に辻がバイクでやってくる。

おはよう。今日は鶴岡まで行く大遠征だべ。辻君、疲れてない。大丈夫

夫だっぺ？」

大丈夫です。よしと。あおいさん、後ろに乗ってください。下道だと鶴岡到着はお昼頃になりますけど、途中でコンビニによりますからトイレとコーヒープレイクをしましょう」

こんな具合で二人のバイクでのラーメン店巡りが週一回ルーティン化している。美登里さんと登和さんは、亘が大角の厨房を担い、あおいさんが保育園勤務のかたわらで大角のホールを仕切る場面』を妄想する。いやこの妄想は現実化する可能性が高い。そんな美登里さんと登和さんに対して、昌悟さんは決まってこう言うのだ。

「お義母さんも登和も、若い二人をそつと見守っていくべし。いつかスーツでバシッと決めた辻君が訪ねてきて『あおいさんと結婚させてください』って言うてきますから。僕は辻君とあおいを信じて待つだけの心境ですから。見守るべし。見守るべし」

十一月。辻はスーパの仕込みを徐々に任せてもらえるようになった。だが、まだまだ美登里さんの熱血指導は続く。それでもこの約三ヶ月でホールのあおいさんとのかけ合いは板についてきた。

牛しお並盛、三。おあと牛しうゆ大盛が四、入ります」

あおいさんのよく通る声に、辻も元氣よく答える。

はいよ。牛しお並三。牛しうゆの大が四」

若い二人のやりとりに厨房の片隅で、にやにやと微笑む美登里さんがいる。

よし。よしだべ。息もあつてきたべ。来年あたりバシッとスーツ着た辻君

に会えるっべかな…』

また妄想列車を走らせる美登里さんだ。

END



あつたらいいな！こんな○○

井栗小学校

一年 土田 唯香

わたしはかわいいふでばこがほしいです。

わたしはかわいいのが好きなのです。とくにキラクターのかわいいのが好きです。ゆびでふでばこのふたを、

「ゆっ！」

となぞると、キラクターがでてきて、かわるのがいいです。くろみちゃんやきめつのやいばのねずこが、好きなきにかえられるとうれしいです。

好きなキラクターが、いろいろとでてくるふでばこがあつたらいいです。

一年 古川 亜央翔

ぼくは、こどもがうんでんできるくるまがいいです。

ぼくは、くるまが好きです。うんでんせきがかっこいいです。じぶんでうんでんせきにすわってどうろをはしりたいです。しんごうがあおになつたら、すーつとはしつていきたいです。じどううんでんで、ぜったいここにあわないようなくるまがいいです。

くるまのかたちは、やねがまるくなっているのがいいです。五人のりぼ

くとママとおにいちゃんのれるといいです。

こんなくなるまではしつてみたいです。

一年 石塚 恵麻

わたしはじどうがつかうのしたくをしてくれるどうぐがほしいです。

わけは、がつかうのしたくがたいへんだからです。パンダのろぼとがしてくれるといいです。つかうときは、おなかにぼたんがあります。おすと、ぜんぶしたくをしてくれます。

あさ、パンダがランドセルのしたくをしてくれます。そして、おちゃかみずをくんで、すいとうにいれてくれます。おねがいすると、はみがきまでしてくれます。

そんなおてつだいロボットがあつたらいいな。

二年 西村 碧乃

わたしは、おうちのちかくにディズニシーがあるといいです。

わけは、ディズニシーがちかくにあると、ともだちといっしょにあるいていけるからです。

二年 横田 胡乃

わたしは、おうちの近くにディズニランドがあるといいです。

わけは、赤ちゃんがいたいへんなので、近くにディズニランドがあれば、すぐに行くことができるし、帰りも早いです。最近、ディズニ

ーにあたらしいエリアができたから、行ってみたいです。家族やおじちゃん、おばあちゃんやお友だちと行きたいです。

あつたらいいな、近くのデイズニー！

二年 西谷 愛生

わたしは、近くに楽しいプールがあるといいです。

わけは、近くにそのプールがあつたら楽しそうだからです。

中にいろんなお店があつて、泳いでおながすいたら、いろんなものを食べて、すぐにプールで泳ぎたいです。

お店は、かきごおりやさん、ジュースやさん、チャーハンやオムライスを出すお店、おすしやお肉も食べほうだいいいです。そして、お友だちと家族とみんなでいきたいです。

そんなプールがあつたらいいな。

三年 荻根沢 七星

わたしは、あつたらいいな、こんな公園」をテーマにします。

わたしはあそぶのが好きです。とくに友だちとあそぶのが好きです。だから、友だちとあそべるところをだいいじにしたいです。

たとえば、すべりだいは、夏になったら上からせんぷうきとクーラーがでてきて、冬になると、すべるところがあつたかくなるようなすべりだいがあつたらいいです。

すべりだいの下はひみつきちのようになっていて、日の光で、上から光

がもれて、きれいに見えるというすべりだいです。

人数分だけのびる、花のつるでできたブランコ。

ふつかふつかのシーソー。

まわりの木は、とけないわたあめ。(たべるととけます)

そんなゆめのつまつた公園があるといいです。

三年 土田 澄花

わたしはそらとぶシャボン玉がほしいです。

なぜなら、東京など、県外にしゃんせんなどいくと、お金がかかるからです。そこで、シャボン玉を使います。シャボン玉が空をとび、うちゅうまでもいきます。シャボン玉がわれるのは、地面についてからわれます。それもたくさん！もちぬしがもつていれば、シャボン玉が出ます。むげんにシャボン玉が出ます。

そんな空とぶシャボン玉がほしいです。

三年 大久保 叶都

ぼくは、三条にデンカビックスワンがあるといいです。

ぼくはサッカーをならっているの、にいがたアルビレックスのしあいをみて、勉強して強くなりたいからです。そして、アルビレックスの選手になつて、日本だいひょうのせんしゅになつて、かつやくしたいです。野球の大谷しょうへいせんしゅより、かつやくしたいです。

三年 土田 犀朱

ぼくは、さつまいも王国があつたらいいな、と思います。

りゆうは、スイートポテトがすきだからです。そして、おならがプーとでるからです。いっぱいたべて、おならをするからです。

おしりたんでいを見ていて、それからさつまいもを食べたらすきになりました。もつと食べたいです。

三年 田邊 陽奈子

わたしはうさぎが学校にいたらいいな、とおもいます。

わたしはうさぎが大好きです。おともだちといつしよにうさぎににんじんをあげたいです。

三年 川崎 まこ

学校のちかくにキリンがいたらいいな。

わたしはキリンが大好きです。友達のひなこさんといつしよに、キリンにのりたいです。

六年 古川 遥輝

僕は子供が運転できるバイクがほしいです。

理由は、バイクに乗りたからです。でもバイクに乗るには免許が必要で。だけど子供はのれません。車が進化して自動運転ができるようになっていきます。ハンドルが自動で動いて行きたいところに連れて

つてくれます。おなじようなことができるバイクがほしいです。バイクは走らないと転ぶので誰が乗っても安心安全なバイクに乗りたいたです。そんなバイクがあつたらいいです。

六年 佐藤 ひなり

私は日常生活でやりたくないことをやってくれるロボットが欲しいです。

理由は、日常生活で大変なことが沢山あるからです。

例えば宿題です。

六年生になると一日六〇分することになりますが、量も多くなるし、内容も難しくなります。出来るところは自分でやるけど、難しくてできないという時にロボットにやつてもらいたいです。

私は家のお風呂掃除も二日に一回やっていて、面倒くさいと感じる時があります。そういう時にも、ロボットにしてもらいたいです。

さらに習い事の時に、一瞬で家に帰れるワープ機能があると便利です。そうすれば私も一瞬で行き帰りができるし、親も送り迎えせずに楽ができるからです。その間に私は自分の好きな事をして楽しみたいです。

そんな色々な事が出来るロボットがあつたらいいな。



布ぞうり作りを体験して

旭小学校二年生

伊藤 流星

今日、布ぞうりを作りました。小林先生に教えてもらいました。まず、ひもを上下、上下とこうごにむすびました。布ぞうりができたら、つぎは布ぞうりのひもを切る作ぎようがむずかしかったです。できあがった布ぞうりをはいたとき、うれしかったです。つぎはもつと上手に作れるようにがんばりたいです。

(お家の方)

持ち帰った布ぞうりを「できたよ!」と嬉しそうに見せてくれました。手ざわりもよく、水色と白の色合いがかわいかったです。使わなくなつたバスタオルを布ぞうりにするという貴重な体験をありがとうございました。

菅原 柚葉

今日、布ぞうりの小林先生が来て、布ぞうりを作りました。小林先生が半分作ってくれていて、かかの方を自分で作りました。むずかしかったけど、だんだん上手くできるようになりました。さいごにみんな

でしゃしんをとりました。楽しかったし、もつとやりたいなと思いました。

(お家の方)

とても上手に編んであつて、二年生の子が作ったと思えないくらい丁寧にできていました。今度は家族の分もお願いします。作り方も教えてね!

高橋 和花

今日は、布ぞうりを作りました。小林先生におしえてもらいました。さいしよは、できるかな、と思つたけど、すごく楽しくてよかつたと思いました。左足の布ぞうりでくせんしたけど、楽しかったのでまたやりたいなと思いました。

(お家の方)

編むのは楽しかったんだけどヒモのところをくつつけるのが難しかったんだよね」と作っている時の様子を、目をキラキラさせながら楽しそうに教えてくれました。材料が使い古したバスタオルだったので、とても肌触りが良く、足になじんでいるようで本人は喜んではいいます。ちゃんとぞうりの形になるのか…と心配していましたが、ステキな物に仕上がっていました。良い経験をさせていただき、ありがとうございました。

田澤 慈央

今日は、布ぞうりを作りました。さいしよは、バスタオルを上下、上下に入れて、おわたたら小林先生がなおしてくれました。はなおも直してくれました。あみ方をおぼえるまでは、さいしよはむずかしかったです。いちばん楽しかったのは、さいごにうらの切れはしをもぐすところです。楽しかったし、おもしろかったです。またつぎに布ぞうりを作るときは自分でぜんぶ作ってみたいです。

（お家の方）

とても上手にぞうりが編めていてびっくりしました。本人も楽しくできたみたいで「お家でも編む！」とはりきっていました。

田邊 莉乃

今日は布ぞうりを作りました。まず、布をあみました。でき上がったら、はだしになって布ぞうりをはいてみました。タオルで布ぞうりをあむのが楽しかったです。むずかしかったのは、切れはしを布ぞうりにもぐすことです。自分で布ぞうりを作ることができてうれしかったです。小林さんは、すごかったです。

（お家の方）

作品を作ったことが一番楽しかったようで、帰ってからも沢山話してくれました。前日から 明日が楽しみ。色々教えるね。」と楽しみに

していた娘。作った物をどのように作ったかも教えてくれました。その姿に成長を感じられました。家ではなかなか出来ない制作で先生方、講師の小林さん、大変ご苦労されたことと思います。素晴らしい作品をありがとうございました。

トランドウクミン

学校で布ぞうりを作りました。井栗公民館の小林先生が来て、板をつかって布ぞうりを作りました。布を間にいっぱいとおして作りました。と中からよく分からなくなっただけ小林先生がおしえてくれて、だんだん楽しくなってきました。さいごに布ぞうりのひもを引っばると、本物のぞうりになってすごかったです。しあげもして、布ぞうりができました。楽しかったです。つぎはもっと上手に作りたいです。

（お家の方）

まず、驚きの一言です。この経験を生かし、本人には、様々なことについて考え、工夫を見つけながら多くの制作活動に取り組んでいくと考えると嬉しいです。

漆原 麻伊

二年生と一緒に「タオルで布ぞうり作り」を体験しました。使い古したタオルの使い道は、いつもぞうきんだけだったので、他の素敵な使い道を知ることができました。また使い古したタオルだけでなく、もう古いタオルだけど、思い出のタオルで捨てられない！というタオルも、小林さんの職人技でまた一つ大事な思い出が増える。思い出のタオルの第二の人生だなあ…としみじみ感動しました。素晴らしい小林さんの技術で、貴重なSDGs体験をさせていただき、心から感謝しています。



作詞「平和っていいね」

長橋正宣

一、平和っていいね

あなたわたしが なごやかに
語りあうってほんとにいいね
地球に生まれて 生きている
誰も思いは 同じこと

みんな仲よく 平和っていいね。

二、平和っていいね

いがみあわずに おたがいに
支えあうってほんとにいいね
困っている人 みつけたら
愛の手を貸す 思いやり

みんな仲よく 平和っていいね。

三、平和っていいね

であいふれあい なごやかに
信じあうってほんとにいいね
心と心をつなぎとめ
笑顔奏でる 睦みあい
みんな仲よく 平和っていいね。

作詞「防犯のうた」

長橋正宣

一、おはようお日さま ご機嫌さん

向こう三軒 両どなり
交わす笑顔の 花が咲く
防犯声かけ 手をつなぎ
まちから暴力 通せんぼ
いつも心に 強い意志。

二、安全・安心 胸に抱き

にぎるハンドル よいマナー
守る信号 身を守る
防犯地域 手をつなぎ
非行もなくて 見守って
いつも心に 戸締りを。

三、おやすみ戸じまり 確かめて

あすも元気で がんばろう
家族たのしく 夢を見る
防犯街じゅう 手をつなぎ
オレオレ詐欺に 気をつけて
いつも心に 赤信号！。

自然教室の思い出

六年生

旭小学校 五・六年生

昼どきに 汗水流して 作る飯

泉田 統希

妙高の 自然の中で 深まる仲

落合 深雪

燃え盛る 炎に響く みんなの声

酒井 陽真

新緑の シーソーゆれる そつとのる

菅原 李桜

妙高で 自然の大切 学んだよ

曾根 希介

森の腹 遊び声が 響いてる

鳥羽 諒

暑い中 うどん食べたよ 熱すぎる

西村 唯那

五年生

絆深まる みんなで笑った スタンプだ

青木 春翔

火を見つめ みんなの心 いい気持ち

大桃 心花

森の中 ミッション協力 クリアでき

大山 思穂

バイキング 朝から豪華 最高だ

笠原 大偉也

三人で かまど担当 疲れたよ

工藤 彩愛

最高だ 妙高の朝 青空だ

高橋 悠来

火の回り みんな輪になり マイムマイム

高橋 勇人

バイキング キャンプファイヤー 思い出だ

田沢 蓮汰朗

火を見つめ 集中すると 無になりつつ

塚田 咲人

バスで行く 流れる景色 妙高へ

難波 いまる

四季詠草

伊久礼俳壇（順不同）

玉音に父の無言や蟬しぐれ
戦争を止める術なき秋の風
炎昼の鶏冠の紅の極まりぬ

鶴巻雄風

処暑のきて政党政治騒がしく
藍浴衣気風を見せし旦那衆
枝豆は天下一なる馳走かな

村越允弘

心太すすりながらの生返事
今朝の風掃くには惜しいこぼれ萩
無人駅白い日傘を一人乗せ

山崎洋子

表札の亡夫の名前月朧
散り始む桜に我が身重ねけり
おだやかに過す余生や秋深む

田辺起知

凄まじや夏草の丈堀をこし
秋暑し月一回の医者通ひ
秋澄むや上着一枚新調す

捧 時子

早春や夢かたり合ふ女学生
芽出ぬかと鉢に目のゆく日永かな
若葉なる朝の山並美しき

菊田チイ

駆ける児の鞆にのぞく土筆かな
ひと言を省みている余寒かな
置き去りのおもちゃ片付けおぼろ月

市川明美

池底の朽ちし葉映し薄氷
土手沿いの賑はい去りし散る桜
うたた寝の友となりしや蟬の声

田辺克文

老い進み句作楽しや俳句の日
盆提灯揺れる光に夢を見て
秋めいて騒ぐ落葉の小道かな

小出のぼる

水温む今日も働く手を洗ふ
大根引く千人針を縫ひし手に
夕端居代りのきかぬ人と居て

関川芳弘

あとがき

委員長 大山 隆 夫

伊久礼もお陰様で七十号を迎えることが出来ました。

今年は元旦に能登沖地震が発生し波乱の幕開けとなりました。被災された皆様には一日でも早く平穏な日常を取り戻せる事を願っております。

さて、伊久礼七十号の節目に編集委員長を賜り、非常に光栄に思っております。今回も皆様より多くの寄稿を頂き感謝を申し上げます。十五年程前に伊久礼に出会い委員として携わって参りました。今では伊久礼の編集が毎年の楽しみになっております。

聞き書きレポでの故郷への思い、歴史、皆様の体験談、地域の小学生のあつたらいいな、俳句など非常に読み応えがありました。

今後も、たくさんの方々に伊久礼を知って頂き、楽しんで頂ける様努力してまいります。

これからも皆様のご協力をお願い申し上げます。

文集「伊久礼」

発刊委員

委員長	大山 隆夫
委員	大桃 伸之
委員	菅原 昭子
委員	熊倉 貞子
委員	藤田 清子

